

頭中將の視線

——源氏の「隠ろへごと」と関連づけて——

権 桃楹

一、問題の所在

頭中將という官職名で知られる左大臣家の嫡子は源氏の親友を演じ、また政敵を演じる人物である。彼は弘徽殿方からの勘当を恐れずに源氏の流謫している須磨を訪れた親友だった⁽²⁾須磨²¹⁾。が、須磨・明石から帰京した源氏が政治家としての風貌を備えるようになると、今度は源氏と政治的に対立する人物となる。この落差のためか、頭中將に関する研究は人物像の変貌を取り上げる論考が多い。その問題に関しては、物語世界の変容に応じて「好色者」から「政治家」へ変貌したという武原弘氏の論が正鵠を射ている⁽²⁾。ところで、頭中將という人物に関する研究は、武原氏の論もそうだが、政治家としての側面に関心が偏る傾

向があり、彼が政治家としての面貌を顕わにする滯標卷以前に関する研究は比較的少ない。頭中將が本格的に活躍し始める帚木卷から葵の上の死を取り上げる葵卷までを考察の対象にする所以である。

政治家としての面貌から離れた頭中將に関しては、源氏の「隠ろへごと」と関連づけて論じた金孝淑氏の研究⁽³⁾が注目にあたしい。氏は玉鬘の物語が末摘花の物語を經由することを論証するにあたって、頭中將が源氏の「隠ろへごと」を照射することを指摘した。空蟬・夕顔・若紫・末摘花を源氏の「隠ろへごと」だと捉えた重松信弘氏の論⁽¹⁾を継承発展させた金氏の論は大いに首肯される。が、頭中將が登場してくる意義は源氏の「隠ろへごと」を照射するところだけに止まらない。

「隠ろへごと」とは、当該箇所はのちに掲げるが、帚木卷の冒頭にある表現である。源氏の身分に釣り合わない中の品との交渉ゆえの秘密という萩原広道の解釈が通常のものである。が、実際の理解においては多様な諸説があり、統一的な見解はまだない。前述の重松氏のように若紫や末摘花を中の品に入れて数える立場や、高田祐彦氏のように葵の上を除外した源氏の女性関係をすべて「隠ろへごと」に見なす立場などと諸説がある。本稿では源氏の「隠ろへごと」の範疇も視野に入れつつ、頭中将の登場意義を考察する。

二、観察者の頭中将 — 葵卷から紅葉賀卷へ —

葵の上の四十九日を繰り上げて終えた源氏は、妻の不在を大きく感じながら左大臣家に籠もっていた(②葵54)。そこに三位中将に昇進しているかつての頭中将が度々やって来る。物語は慰め合う二人の貴公子の様子を、

…(頭中将ハ)世の中の御物語など、まめやかなるも、また例の乱りがはしきことをも聞こえ出でつつ(源氏ヲ)慰めきこえたまふに、かの内侍(≡源典侍)ぞうち笑ひたまふくさはひにはなるめる。…かの十六夜のさやかならざりし秋のことなど、さらぬも、さまざま

まのすき事どもをかたみに隈なく言ひあらはしたまふ、はてはては、あはれなる世を言ひ言ひてうち泣きなどもしたまひけり。(②葵54)

と伝える。物語は慰めに来た頭中将の心遣いと彼に応じて戯れ合う源氏の様子を描く。かつての「すき事」を語り合う二人の貴公子の様子は葵の上を亡くした悲しみから逃れようとするかのように思われる。まずは二人が、源典侍や末摘花のようなくともに関わり合った女性だけでなく、各々の女性関係を「隈なく言ひあらはし」たことに注目したい。

周知の如く、「すきがましきあだ人」(①帚木54)の頭中将は雨夜の品定めで内気な女との関係を打ち明けた。そのためだろうか、彼が源氏の前で「すき事」を語ることには不自然さがない。しかし、頭中将に源典侍との逢瀬を見られて「いと口惜しく」(①紅葉賀34)思っていた源氏が「さまざまのすき事ども」を打ち明けたことには違和感を覚えずにはいられない。一応は葵の上を亡くした悲しみを癒やそうとした源氏があえて語ったものだと考えられよう。が、それは結局のところ、葵の上を亡くした悲しみを浮上させる結果となる。源氏の「すき事ども」の一因が生前の葵の上に「思はずにのみとりないたまふ心づきなさ」(①紅葉賀316)にあることを考えると、「つひには(葵ノ上ガ)おのづ

から見なほしたまひてむとのどかに思ひて、なほざりのすさびにつけても、つらしとおぼえられたてまつりけむ」(②葵48)とある後悔を裏付けるために、物語が頭中将の前で「すき事ども」を打ち明ける源氏を描いたと言えよう。

物語は「すき事ども」に没頭していて葵の上を顧みなかったことを後悔する様子を通して妻を亡くした源氏の悲しみを語るが、それは頭中将の目にも度々映っていた。葵の上に死なれて悲嘆に暮れる源氏の様子は、

(A)：あやしう、年ごろはいとしもあらぬ御心ざしを、

①(桐壺)院などゐたちてのたまはせ、②(左)大臣の御もてなしも心苦しう、大宮の御方さまにもて離るまじきなど、かたがたにさしあひたれば、(葵ノ上)えしもふり棄てたまはで、③(源氏ハ)ものうげなる御気色ながらあり経たまふなめりかしといとほしう見ゆるをりをりありつるを、まことにやむごとなく重き方はことに思ひきこえたまひけるなめり、と見知るに、(頭中将ハ)いよいよ口惜しうおほゆ。(②葵56)

と、頭中将の視線を通して語られる。が、頭中将は葵の上の死を悲しむ源氏の様子から違和感を覚えた。何年もの間、源氏が葵の上には心が惹かれなないかのように振る舞ってきたためである。頭中将の目に映った源氏の様子は、「若紫

ヲ迎エタコトヲ)心うつくしく例の人のやうに(葵ノ上ガ)恨みのたまはば、我もうらなくうち語りて慰めきこえてんものを、思はずにのみとりないたまふ心づきなさに、さもあるまじきすさびごとも出で来るぞかし」(①紅葉賀316)と、葵の上を不満に思っていた様子と照応する。葵の上の心隔てに対する源氏の不満は、「世には心もとけず、うとく恥づかしきものに思して、年の重なるに添へて、御心の隔てもまさるを、(源氏ハ)いと苦しく思はずに、…」(①若紫226)と、「思はずに」の繰り返しによって表現されるが、③の「ものうげなる…」によると、頭中将にはそのような源氏の内面が見透かされていたかのである。「右大臣のいたはりかしづきたまふ住み処(「四ノ君」を「いとものうくして」いた頭中将(①帚木54)ならではの理解だろうか。ともあれ、頭中将は、源氏が葵の上を棄てない理由として、①や②に見る桐壺院や左大臣の努力を数えていた。

源氏を葵の上のそばに留めておく桐壺帝や左大臣の努力は紅葉賀巻から窺える。桐壺帝は源氏が若紫を二条院に迎え入れたことを聞いた時、「いとほしく大臣の思ひ嘆かるなることも、げに。ものげなかりしほどを、おほなおほなかくものしたる心を、さばかりのことたらぬほどにはあらしを、などか情なくはもてなすなるらん」(①紅葉賀334)

335)と訓戒した。幼い頃から世話を焼いた左大臣の恩恵を知つていながら「情け」なく振る舞うと、源氏を詰るかのような桐壺帝の言葉だが、①の「院など」によると頭中将にもそれが耳に届いていたようである。無論、物語には頭中将が桐壺帝の言葉を直接聞いていたかは語られない。だが、帝に近侍する藏人頭という官職から考えると充分に可能な設定であろう。なお、②「大臣の…」も同様に考えられる。彼は左大臣家の嫡子だったゆえに、

(左) 大臣も、かく頼もしげなき(源氏ノ)御心を、つらしと思ひきこえたまひながら、見たてまつりたまふ時は、恨みも忘れてかしづきいとなみきこえたまふつとめて、(源氏ガ)出でたまふところにさしのぞきたまひて、…(左大臣ガ源氏ノ)御衣の後ひきつくるひなど、御沓を取らぬばかりにしたまふ、いとあはれなり。

(①紅葉賀323)

と源氏を世話する父左大臣の様子を難なく目の当たりにできたのである。源氏が二条院に女を迎えたという噂を聞いた左大臣は源氏をつらく思っていた。しかし、源氏が前にいると恨めしいことを忘れて世話役を買って出る。婿を「ゆゆしうつくしと思ひきこえ」ていた左大臣が(①桐壺48)光という言葉に象られる源氏の美質に心惹かれていたため

でもあろう。が、右の引用で源氏を世話する左大臣に対する憐憫の情を催す語り手の姿勢に留意すると、大臣の行動は源氏を葵の上のそばに留めて置くための努力として捉えるべきであらう。そのような理解が引用(A)の②「大臣の…」からも窺え、右の引用はその裏付けになる。これらのことから引用(A)ではかつての物語に語られていた内容が観察者の視点から繰り返されていると考えられる。換言すれば、頭中将が右に確認した引用(A)の①②③と対応する出来事を語り手とともに見てきたということである。引用(A)においても頭中将は、妻を亡くした源氏を観察することによって妹の葵の上の死をさらに口惜しく思っていた。ここでは、その過程において葵の上に対する源氏の愛情が「まことにやむごとなく重き方はことに思ひきこえたまひける」と位置づけ直されることを押さえておく。

観察者としての頭中将の位相と言えば、源典侍と源氏の逢瀬が発覚する紅葉賀巻の描写も欠かせない。源典侍と源氏の関係を取り上げる物語の意義は、それを発見した桐壺帝の「(源氏ニ)すき心なしと、(世間ガ)常にもて悩むるを、さはいへど、過ぐさざりけるは」(①紅葉賀338)とある言葉から窺えるように、源氏の「すき心」が露見するところにある。これを考え合わせると、葵の上の死後に頭中将の前

で「さまざまのすき事ども」を残りなく言い顕したことによって、源氏の「すき事ども」は「隠ろへごと」ではなくなったことが確認できるのではないだろうか。無論、源氏の態度変化には葵の上の死によって左大臣家を意識する必要がなくなった状況の変化も看過できない¹²⁾。のみならず、それには源典侍との一件が頭中将に目撃されたことも関わっている。頭中将に源典侍との一件を見られていたために、源氏には「さまざまのすき事ども」が語りやすかったということである。ところで、源氏は、頭中将が自分に対する理解を欠いていたことを知っていたかどうか。

桐壺帝に発見された源氏と源典侍の関係は、すぐに噂となって世間に広まる。その噂を聞いた人々が「思ひの外なることかな」(①紅葉賀³³⁹)と「思ったことに対して、頭中将は「いたらぬ隈なき心にて、まだ思ひよらざりけるよ」(①紅葉賀³³⁹)と競争心を燃やしていた。「すぎがましきあだ人に相応しい反応であり、そのような人物の競争心を操ることで物語は笑劇を繰り広げる準備を整えるのである。ところで、「齢のほどいとほしければ慰めむ」(①紅葉賀³³⁹)と源氏が源典侍に同情していたことを考えると、頭中将が「いたらぬ隈なき心」の競争心を燃やしていたことは見当違いである。にもかかわらず、頭中将の発した「いたらぬ隈な

き心」という言葉は説得力を持つ。物語は、頭中将に知られることはなかったものの、源氏の「さまざまのすき事ども」を語ってきたのである。

源典侍との一件によって頭中将は、以前から疑惑を持っていた源氏の女性関係を目撃する。それを嬉しく思う頭中将の様子は、

頭中将は、この君(＝源氏)の、いたうまめだち過くして、常にもどきたまふがねたきを、つれなくてうち忍びたまふ方々多かめるを、いかで見あらはさむとのみ思ひわたるに、これ(＝源氏ト源典侍トノ逢瀬)を見つけたる心地いとうれし。かかるをりに、すこしおどしきこえて、御心まどはして、「懲りぬや」と言はむと思ひて、たゆめきこゆ。(①紅葉賀³⁴¹)

とあるところから察せられる。頭中将は自分の女性関係に対する非難の腹いせに、親友の女性関係を見顕わす機会を狙い続けて来た。源典侍と源氏の逢瀬によって漸くその機会を掴み得たと言えようが、裏を返せば、それまでの頭中将には源氏の「まめだち過ぐし」た面しか観察できなかったことになる。物語は「夜昼、学問をも遊びをももろとも」にし、「いづくにてもまつはれきこえ」ていた(①帚木⁵⁴)親友の目を通して源氏が「すき事」を上手に隠していたこ

とを表しているのである。が、頭中将には早くから源氏が「すき」を隠していることが感知された。源典侍との一件によって頭中将はその直感を確信するようになったが、葵の上の死を悲しむ様子を目撃する頭中将の思惟から察するとその確信も偏ったものである。物語は「まめ」でもなく「すき」でもない源氏像を形象して行く方法として、源氏を観察する頭中将の視線を巧みに操っているのではないだろうか。

三、「隠ろへごと」と頭中将

— 帚木三帖を中心に —

源氏の日常を観察する役割を担っていたものの、頭中将には制約があった。源典侍との一件がある以前の彼には、源氏と「夜昼、学問をも遊びをも」ともにしながらも、友人の女性関係を見抜くことが許されなかった。本節ではその意味を探るが、その前にまず帚木巻の冒頭を確認しておく。

光る源氏、名のみことごとしう、言ひ消たれたまふ咎多かなるに、いとど、かかるすき事どもを末の世にも聞きつたへて、軽びたる名をや流さむと、忍びたまひける隠ろへごとをさへ語りつたへけん人のもの言ひさ

がなさよ。さるは、いといたく世を憚りまめだちたまひけるほど、なよびかにをかしきことはなくて、交野の少将には、笑はれたまひけむかし。 (①帚木53)

これについては『弄花抄』が源氏の表面と内実とにおける相違を指摘したことが注目にあたいしよう。「光る君といふ名は、高麗人のめできこえてつけたてまつりけるとぞ言ひ伝へたるとなむ」(①桐壺50)とある桐壺巻の末尾を受け継ぐものの、「光る源氏」の実体はその「名」に齟齬していたのである。その実体の一面として語り手は、軽薄だという噂を恐れて隠していた源氏の「すき事ども」を暴露する。いかにも源氏の「隠ろへごと」を知っているような口ぶりだが、語り手はそれを人に語り伝えることに抵抗を感じている。それは「隠ろへごと」を自分に語り伝えた人を「人のもの言ひさがなさ」と非難するところから窺える。が、「隠ろへごと」に言及する語り手の態度はかえって帚木・空蟬・夕顔の帚木三帖に繰り広げられる内容を推測させる。その推測を是認するかのように、帚木三帖の末尾には、源氏の「隠ろへごと」に対する語り手の態度が目立つ右の引用に照応する内容がある。

かやうのくだくだしきことは、(源氏ノ)あながちに隠ろへ忍びたまひしもいとほしくてみなもらしとどめた

るを、など帝の皇子ならんからに、見ん人さへかたほ
ならずものほめがちなると、作り事めきてとりなす人
ものしたまひければなん。あまりもの言ひさがなき罪
難りどころなく。(①夕顔195〜196)

空蟬や夕顔などとの関係を語った語り手は右のように語
った時点で、すでに源氏の意に逆らっている。点線を施し
た部分には源氏の隠していた「すき事ども」を漏らした理
由が語られる。物語は事実性を高める目的で語りを重層化
して源氏の「隠ろへごと」を露見させたのである。が、依
然として語り手からは源氏の意に逆らうことに対する抵抗
が垣間見られる。帚木三帖の序跋における語り手は「隠ろ
へごと」の露見に携わっていないながらも、それに抵抗を感じ
ていたと言えよう。そのような相反する語り手の態度と類
似する関係が帚木三帖での源氏と頭中将から見出せること
を以下に確認する。

つれづれと降り暮らして、しめやかなる宵の雨に、殿
上にもをさをさ人少なに、御宿直所も例よりはのどや
かなる心地するに、(源氏ハ)大殿油近くて書どもなど
見たまふ。近き御厨子なるいろいろの紙なる文どもを
引き出でて、(頭)中将わりなくゆかしがれば、「さりぬ
べきすこしは見せむ。かたはなるべきもこそ」とゆる

したまはねば、「そのうちとけてかたはらいたしと思さ
れむこそゆかしけれ。…おのがじし恨めしきをりを
り、待ち顔ならむ夕暮などのこそ、見どころはあらめ」
と怨ずれば、やむごとなく切に隠したまふべきなどは、
かやうにおほぞうなる御厨子などに向ち置き、散らし
たまふべくもあらず、深くとり置きたまふべかめれば、
二の町の心やすきなるべし。(①帚木55)

雨夜の品定めでは理想の女性に巡り会うことの難しさと
中の品の女性の良さが説法の形を借りて繰り広げられ
る。中の品の女性を知らない源氏が、謂わば、頭中将や左
馬頭などの説く説法をひたすら傾聴する立場にまわされた
のである。のちに、「かやうの(空蟬ノヨウナ)並々までは
思ほしかからざりつるを、ありし雨夜の品定めの後、いぶか
しく思ほしなる品々あるに、いとど隈なくなりぬる御心な
めりかし。」(①夕顔144)とある箇所^①に照らして考えると、
源氏を中の品の女性との交渉に導くために雨夜の品定めが
設けられたとも言える。

五月雨の夜に繰り広げられる雨夜の品定めは淑景舎にい
る源氏と頭中将の様子を語ることから始まり、左馬頭と式
部丞が合流することで本格的に盛り上がる。右の引用はそ
れを導くための準備と言うべく、点線を施した部分にはそ

の背景となつてゐる時間と空間が提示されている。物語は五月雨の夜に書物を読んでゐる源氏とその横で色とりどりの紙を前にした頭中将の様子を描くことから、雨夜の品定めを語り始める。源氏は自分あての手紙を読みたがる頭中将に、さしさわりないものだけなら読ませると許した。一

方、頭中将はよそに見られては困るものが読みたいのだと文句めいたことを言いながら、源氏あての手紙を読む。手紙を読みながらその送り主を推測する頭中将に対して源氏は「言少なにて、とかく紛らはしつとり隠す(①帚木56)。

頭中将には源氏の女性関係に興味があるものの、その実体を詮索する試みは源氏によつて遮断されていた。頭中将から「女の、これはしもと難つくまじきはかたくもあるかなと、：」(①帚木56)という女性論を導いた源氏の言葉も自己防衛として理解できよう。すなわち、「そこ(＝頭中将)にこそ(手紙ヲ)多く集へたまふらめ。すこし見ばや。：」(①帚木56)とある源氏の言葉も頭中将の興味をそらすために発せられたということである。雨夜の品定めが源氏の女性関係に対する頭中将の興味と、女性関係を隠す源氏との対立によつて導かれてゐると考えである。ここではそのような対立が帚木三帖で源氏の「隠るへごと」を暴露する語り手の二元的姿勢と類似することを押さえてお

く。無論、前述の如く頭中将が源氏の隠していた女性関係を目の当たりにするのは源典侍との一件である。それ以前の頭中将は源氏の隠している女性関係を詮索し続けるもの近づけない人物である。

(頭) 中将、「さらば、さるよしをこそ奏しはべらめ。昨夜も、御遊びにかしく求めたてまつらせたまひて、桐壺帝ハ御気色あしくはべりき」と(源氏ニ)聞こえたまひて、たち返り、「いかなる行き触れにかからせたまふぞや。(乳母ノ見舞テ下人ノ死ニ遭遇シ、マタ風邪気味ダト)述べやらせたまふことこそ、まことと思ひたまへられね」と言ふに、(源氏ハ)胸つぶれたまひて、「かくこまかにはあらで、ただおほえぬ穢らひに触れたるよしを奏したまへ。いとこそたいだいくはべれ」とつれなくのたまへど、心の中には、言ふかひなく悲しきことを思すに、御心地もなやましければ、人に目も見あはせたまはず。(源氏ハ)蔵人弁を召し寄せて、まめやかにかかるよしを奏せさせたまふ。

(①夕顔174～175)
夕顔の突然の死に遭遇した源氏は、慌ただしい中でも「忍ぶとも世にあること隠れなくて、内裏に聞こしめさむをはじめて、人の思ひ言はんこと、：：ありありて、をこがま

しき名をとるべきかな」(①夕顔169～170)と世間体を意識していた。そのような源氏の様子は夕顔の亡骸の処置をめぐって惟光と相談するところ(①夕顔171～172)からも確認でき、また右の引用からも窺える。夕顔の亡骸を惟光に預けた源氏は「人さわがしくなりはべらぬほどに」(①夕顔172)二条院へ戻る。そこで源氏は、桐壺帝の使者として訪ねて来た頭中将に、乳母の見舞に行つて下人の死穢に触れたという作り話を語る。一方、頭中将はそれを桐壺帝に伝えると言いながら、昨夜の宴に源氏がいなかったために帝の機嫌がよろしくなかったことを語り出す。そして彼は「まことと思ひたまへられね」と源氏をひやかす。このひやかしからも頭中将が源氏の隠し事の真相を探っている人物だという印象を受ける。無論、「かの撫子(＝玉鬘)は(頭中将ガ)え尋ね知らぬを、重き功に(源氏ハ)御心の中に思し出づ」(①未摘花²⁷³)とある叙述に鑑みると夕顔との関係が頭中将に露見しなかったことを源氏は知っていたと考えられる。にもかかわらず、頭中将のひやかしによつて源氏は動揺し始める。正鶴を射る友人の言葉に平然を装いながらも、源氏は胸がしめつけられて人と目を合わすこともできない。そこから世間の経験が少ない若者の初々しさが読み取れよう。が、物語における頭中将の突然な登場には、若者の初々

しさだけでなく、源氏の「隠ろへごと」も関連しているように思われる。

右の引用で頭中将が桐壺帝の機嫌に関する話をするのは、某の院に夕顔を連れ出した時の源氏が「内裏にいかにも求めさせたまふらんを、いづこに尋ねらんと思しやりて、かつはあやしの心や、六条わたりにもいかに思ひ乱れたまふらん、：」(①夕顔163)と思つた叙述と照応する。源氏は夕顔に耽溺して「ことさらに人來まじき隠れ処求め」て某の院を訪れていた(①夕顔160)。にもかかわらず、彼は桐壺帝が使者を使わして自分を探すことを心配する。この突然な想起は、一見すると、夕顔に耽溺する源氏という設定とは齟齬するかのようであるが、源氏は桐壺帝が探していることを知っていないながらも、あえて行方をくらましてまで夕顔に耽溺したのである。それを「あやしの心」だと思ふところからは、不思議な恋の空間を作りあげる力¹⁸⁾だけだけでなく、夕顔との関係を知らない帝に対する源氏の後ろめたさも読み取れよう。物語は夕顔と源氏の間を知らない世界の住民として桐壺帝を位置づけているのである。その使者として二条院を訪れた頭中将は、謂わば、源氏の「隠ろへごと」を知らない世界から派遣された使者だと言えよう。無論、源氏に「隠ろへごと」の世界があることを感づいて

いる頭中将は桐壺帝よりは敏感である。「すぎがましきあだ人」としての経験と親友という立場とに支えられるためだろうが、そのような彼も源氏の隠した女性関係の内実までは触れられない。物語は源氏の内面を知らないにもかかわらず、知っているかのように振る舞う「すぎがましきあだ人」を操ることで、「隠ろへごと」の露見を恐れる若い源氏の反応を描くのである。

四、「隠ろへごと」への手引き

— 若紫巻・末摘花巻 —

前節では帚木三帖における頭中将が「隠ろへごと」の露見を恐れる源氏の様子を浮き彫りにすることを確認した。引き続いて帚木三帖に次ぐ若紫巻と末摘花巻を中心に頭中将の役割を考察する。ここでは、若紫や末摘花を中の品に入れるべきか否かの問題は差し置き、空蝉や夕顔と同じく源氏が若紫や末摘花との関係も隠そうとしたことに留意したい。末摘花と一夜を過ごしたことを頭中将に「隠いたまふこと多かり」(①末摘花285)と言われ、「聞こえありて、すぎがましきやうなるべきこと」(①若紫252)を心配して若紫の引き取りを隠した源氏である。無論、藤壺や朧月夜等との関係も含め、源氏の女性関係の大半は隠し事である。だ

が、藤壺との関係は言うまでもなく、「源氏が朧月夜二」と忍びて通はしたまふことはなほ同じさまなるべし。もの聞こえもあらばいかならむと思しなから、例の御癖なれば、今しも御心ざしまさるべかめり。」(②賢木101)と語られる朧月夜との関係も源氏の破滅に関わる。そのような二人との関係を「軽びたる名」の流布を恐れて隠した女性関係と同次元で扱って良いだろうか。前者と後者とが頭中将の関与の有無によっても区分できることを考慮すれば疑問はさらに膨らむ。源氏の「隠ろへごと」である中の品の女性との交渉を導いた雨夜の品定めにおける頭中将の役割に關してはすでに触れたので、以下に若紫巻と末摘花巻を中心に頭中将が源氏の「隠ろへごと」の実体に接近しつつあることを確認する。

周知の如く、末摘花巻では「思へどもなほあかざりし夕顔の露に後れし心地」(①末摘花265)を忘れることができない源氏がとんだ醜女を手に入れる内容が繰り返される。夕顔や空蝉との「隠ろへごと」が忘れられない源氏に末摘花を紹介したのは、惟光と同様に乳母子でありながら彼ほどは信頼されない大輔命婦(②)という人物だった。大輔命婦に案内された源氏は頭中将に後をつけられたとは思っても寄らないで、末摘花の弾琴を聴いた(①末摘花268)。

(イ)君(＝源氏)は、(末摘花邸ノ透垣ニ立ツ男ヲ)誰ともえ見分きたまはで、我と知られじとぬき足に歩みのきたまふに、…この君(＝頭中将)と見たまふに、(源氏ハ)すこしをかしようなりぬ。「人の思ひよらぬことよ」と憎む憎む、…(頭中将)「まことは、かやうの御歩きには、隨身からこそはかばかしきこともあるべけれど、後らさせたまはでこそあらめ。やつれたる御歩きは、軽々しきことも出で来なん」とおし返し諫めたてまつる。かうのみ(忍び歩キヲ)見つけらるるをねたしと源氏ハ)思せど、かの撫子(＝玉鬘)は(頭中将ガ)え尋ね知らぬを、重き功に、御心の中に思し出づ。

(①末摘花272～273)

頭中将も透垣に隠れて源氏の帰りを待ちながら、末摘花の弾琴を聴いていた。のちに「君たちは、ありつる琴の音を思し出でて、…人にももて騒がるばかりやわが心もさまあしからむなどさへ、(頭)中将は思ひけり」(①末摘花274)とあることから察すると、この尾行によつて頭中将が末摘花に心惹かれるようになり、物語には醜女を競い合う二人の貴公子の様子が描かれる。二人の競い合う様子は、「その後、こなたかなたより文などやりたまふべし。」と始まる、手紙をめぐる逸話(①末摘花275)から窺える。そもそも末

摘花に対して「深うしも思はぬことの、かう情なきを、さまざま」思つた源氏だったが、頭中将への競争心を燃やして大輔命婦に「まめやかに」相談するようになったのである(①末摘花275～276)。競争心の刺激ということから、頭中将が源氏と末摘花の關係に大きな貢献をしたと言えようが、まずは頭中将も末摘花に手紙を書いたことに注目したい。頭中将が末摘花に手紙を書き得たことは、彼にも宛先が「故常陸の親王の末にまうけていみじうかなしうかしづきたまひし御むすめ」(①末摘花266～267)だと知られていたことを意味しよう。換言すれば、後をつけられることによつて源氏が興味の的となつた女性に関する情報を頭中将に突き止められたということである。無論、末摘花と一夜を過ぎした源氏に対して「隠いたまふこと多かり」と言っている頭中将が親友の隠しごとをすべて知つたとは考えられない。源典侍との一件がある以前の彼には源氏の実体を見あらわすという課題が依然として達成されないまま残されている。そのためだろうか。頭中将が源氏の隨身を買つて出たことからは、夕顔巻における惟光のように、内部から源氏の隠しごとを暴き出したいという狙いが感じ取れる。ともあれ、源氏は後をつけられることで、頭中将と醜女を競い合う羽目になつた。頭中将に競争心を刺激されるこ

とで源氏が末摘花との関係に積極的になったことは右に触れた通りである。そのような展開に引用(イ)で傍線を施した内容が響くことを見逃してはなるまい。結果的に頭中将は、有能な「隨身」となって源氏を女性の許に手引きしたのである。

ところで、頭中将が女性の許に源氏を手引きするのは末摘花巻が初めてではない。頭中将は源氏が夕顔に近寄る際にも貢献していた。惟光から夕顔に仕える右近と女童が交わした頭中将に関する対話を報告された源氏は、「もし(頭中将)かのあはれに忘れざりし人にや」と思って、「(夕顔)いと知らまほしげなる御気色」を見せていた(①夕顔150)。源氏は雨夜の品定めで頭中将が忘れかねていた内気な女かも知れないと思い、得体の知らない女性にさらに心惹かれた。頭中将に忘れられない女性への好奇心だろうか、頭中将に対する競争心だろうか、源氏の期待は頭中将が関連していることでさらに膨らんだのである。

(ロ) (源氏ガ) 御車に奉るほど、大殿(≡左大臣家)より、「いづちともなくておはしましたにけること」とて、御迎への人々、君たちなどあまた参りたまへり。頭中将、左中弁、さらぬ君たちも慕ひきこえて、「かうやうの御供は仕うまつりはべらむと思ひたまふるを、あさまし

くおくらさせたまへること」と恨みきこえて、「いとみじき花の蔭に、しばしもやすらはずたちかへりはべらむはあかぬわさかな」とのたまふ。岩隠れの苔の上
に並みあて、土器まゐる。落ち来る水のさまなど、ゆゑある滝のもとなり。

(①若紫 222～223)

源氏の女性関係における頭中将の関与は、夕顔や末摘花だけではなく若紫との関係からも確認できる。引用(ロ)は左大臣家の者たちが、瘡病の治療のために北山を訪れた源氏を迎えに訪れた場面である。「御迎への人々参りて、(源氏)おこたりたまへるよろこび聞こえ、内裏よりも御とぶらひあり。」(①若紫 220)の叙述がすでにあつたことに照らすと、左大臣家では桐壺帝より源氏の行方を確認するのが遅かったと考えられる。恐らく、夕顔を連れて某院に隠れた時のように、源氏が行き先を知らせなかつたためである。ともあれ、物語は左大臣家の迎えによって「この若君(≡若紫)、幼心地に、めでたき人かなと(源氏)見たまひて、…(女房)「さらば、かの人の御子になりておはしませよ」と聞こゆれば、(若紫ハ)うちうなづきて、いとようありなむと思したり。」(①若紫 224～225)とある、若紫の思惟を描き得た。一旦帰途についた源氏を留めることによつて、若紫に惹かれる源氏の気持ちが一方面的なものではない

ことが示されたのである。そのような迎えの主軸が頭中将であることは、帰京した源氏に左大臣が「(北山へ) 御迎へにもと思ひたまへつれど、忍びたる御歩きに、いかがと思ひ憚りてなむ」(①若紫²²⁵)と語ったことから推察できる。傍線部や点線部の言葉は左大臣家の嫡子として父に替わって北山を訪れた頭中将の発したものだと考えられる。

頭中将の発した点線部の「いとみじき花の蔭に：」は、源氏の北山訪問を「三月のつごもりなれば、京の花、盛りはみな過ぎにけり。山の桜はまだ盛りにて、：」(①若紫¹⁹⁹～²⁰⁰)と語った叙述を背景にし、「宮人に行きてかたらむ山桜風よりさきに来ても見るべく」(①若紫²²⁰)と詠んだ源氏の歌と照応する。その「花の蔭」は桜の花蔭を指す表現で、『古今和歌集』の仮名序にある大伴黒主に関する叙述との関連や春を惜しむ躬恒の和歌の引歌がすでに指摘されている。が、右に述べた頭中将登場の意義に注目すると、「雲林院の親王のもとに、花見に、北山の辺にまかれりける時に、詠める」の詞書を有する素性の「いざ今日は春の山辺にまじりなむ暮れなばなげの花の蔭かは」(『古今和歌集』春下⁹⁵)も看過できないように思われる。常康親王の居所を指す「雲林院の親王のもと」と花見の場所である「北山」とをどのように解釈するかに関する説の多い詞書だが、「花

の蔭」の頼もしさを讃えて「春の山辺」へと誘う歌と捉えるのが通説のようである。素性のこの和歌と右の引用の点線部とにおける「花の蔭」がともに北山への花見に誘う表現となっていることを見逃してはなるまい。なお、桜の喩があてられる若紫が源氏に心惹かれる展開を念頭に置くと、素性の和歌における「花の蔭」の頼もしさも若紫巻に響き渡っているように思われる。すなわち、源氏に対する若紫の心境叙述を導く頭中将の直感が素性の和歌を経由することで頭わになるということである。

引用(口)における頭中将は若紫と源氏を結ばせようとする物語の意志を背負っていると見えよう。換言すれば、引用(口)によって源氏の北山来訪が病氣治癒から女性の許への忍び歩きへとその性格を改めたということである。それは引用(口)の「かやうの御共は：」とある傍線部と引用(イ)の「まことは、かやうの御歩きには：」とある傍線部の類似からも察せられる。両方とも「かやうの：」や「おくら(さ)せ：」の表現を用いて同行を許さなかった恨みを訴えるものとなっている。無論、引用(口)における頭中将の言葉は、一步後れた迎えという決まり悪さを紛らわすべく発せられたものであり、たまたま源氏を尾行して発した引用(イ)とは性格を異にするかに見える。が、引用(イ)の直後に源氏と頭

中将がともに左大臣家に向かう内容が繰り返されることから察すると、そこからも左大臣家の構成員という頭中将の位相が窺えよう。頭中将には左大臣家の構成員として源氏の忍び歩きを詮索する役割が担わされていたと考えられる。しかしながら、源氏が若紫に心惹かれる内容と引用(口)の傍線部との対応から察すると、頭中将には左大臣家の構成員でありながらも源氏を若紫の許に手引きする役割が担わされていたと言える。

五、結びにかえて

左大臣家の嫡子の頭中将は生活圏において源氏と共有する部分が多く、源氏の観察が容易な立場にいた。だが、彼は葵の上を顧みなかったかつての行動を後悔する様子を確認するまで、源氏を総体的に捉えることができない。葵の上の死があるまでの頭中将は源氏の「すき」と「まめ」とを片面しか目の当たりにすることができなかった。このような頭中将の登場が「まめ」でもなく「すき」でもない源氏像の形象に一助となつていると言えよう。

帚木巻での頭中将は、「軽びたる名」を恐れて源氏が隠していた「すき事ども」を探る人物である。物語は源氏の内面を知っているかのような頭中将の言動を用いることで

「隠ろへごと」の露見を恐れる源氏像を築いて行く。無論、源氏は、不義の子冷泉帝を登場させた、藤壺との関係も隠している。だが、露見すると一身の破滅になりかねない藤壺との関係を、世間に知られても一身上の危機にまでは繋がらない女性関係と同一に扱っているとは考えられない。物語は「やむごとなく切に隠したまふべき」(①帚木55)源氏の女性関係を蔵の奥に隠して、「二の町の心やすき」(①帚木56)関係だけに触れさせるために頭中将を登場させたのではないだろうか。

結局のところ、頭中将は源氏の「隠ろへごと」を暴き出そうと努力する役割とともに、源氏を「すき」の世界に導く役割を担わされていた。まるで頭中将は「すきがましきあだ人」という性質で染めて行くかのように、中の品や末摘花・若紫のもとへと源氏を誘う人物でもあったのである。

【注】

(1) 以下に『源氏物語』の引用は小学館の新編日本古典文学全集により、巻数・巻名・頁数を記した。

(2) 武原弘「頭中将論―その人物像の変貌と主題との関連性」『日本文学研究』一九七四年一月、のち「頭中将とその物語

- 世界』『源氏物語論』桜楓社一九七六年九月
- (3) 金孝淑『源氏物語』玉鬘十帖における「隠ろへごと」の再生産―末摘花巻との対比関係から―『国文学研究』二〇〇七年六月
- (4) 重松信弘『源氏物語研究叢書Ⅲ源氏物語の主題と構造』風間書房一九八一年二月二七頁
- (5) 前掲注(4)の重松信弘氏の著書。
- (6) 高田祐彦「光源氏の忍びの恋―『源氏物語』冒頭諸巻の仕組み」『文学』二〇〇六年九月
- (7) 他に「隠ろへごと」に関する論として、伊能健司氏が「帚木三帖」の方法―「隠ろへごと」としての―で失敗を隠すことに注目した(『中古文学論攷』一九八〇年十一月)。
- (8) 「かの十六夜のさやかならざりし秋のこと」に関する解釈の問題は、田坂憲二氏の「〈研究手帳〉かの十六夜のさやかならざりし秋の事」(『いずみ通信』一九八六年十一月)を参照した。本稿では作者のケアレスマスだと捉える島津久基の説に従う。
- (9) 葵の上との結婚生活への不満が帚木三帖の女性関係を導くことの指摘は、伊藤博「葵上」『国文学』一九六八年五月、中川正美「光源氏の時を刻む葵上」『むらさき』二〇〇八年十二月などに見られる。
- (10) 秋山虔「光源氏論」『王朝女流文学の世界』東京大学出版会一九七二年六月
- (11) 伊藤博「源典侍挿話の周辺―紅葉賀・花宴巻断想―」『文学論輯』一九七一年三月、篠原昭二「運命と行爲―たがい目の実現をめぐって―」『国文学』一九七一年六月
- (12) 高木和子氏は「情報操作の政治力」で、葵の上の兄弟の頭中将に左大臣家の一構成員という立場があることを重視する(『男読み源氏物語』朝日新聞出版二〇〇八年七月)。
- (13) 前掲注(2)の武原弘の論文
- (14) 田畑千恵子「源典侍」『源氏物語講座第二巻物語を織りなす人々』勉誠社一九九一年九月
- (15) 高木和子「思考」としてのことは―『源氏物語』の「名」について―『叢書 想像する平安文学 第4巻 交渉することば』勉誠出版一九九九年五月、のちに加筆され『源氏物語の思考』(風間書房二〇〇二年三月)。
- (16) 高橋亨「物語の語り手(1)―帚木三帖の序跋」『講座 源氏物語の世界(第一集)』一九八〇年九月
- (17) 阿部秋生『源氏物語研究序説』一九五九年四月
- (18) 今井久代「夕顔巻の『あやし』の迷路―頭中将五人説を手がかりとして」『国語国文学』一九九六年三月、のちに修正され「夕顔物語の「あやし」の迷路―現実の脈絡とことば

の脈絡―』『源氏物語構造論―作中人物の動態をめぐって』
(風間書房二〇〇一年六月)。

- (19) 森一郎氏は「頭中将論」で、夕顔巻において源氏と同次元的世界で活躍していない頭中将を指摘した(『源氏物語作中人物論集』勉誠社一九九三年一月)。

- (20) 『新編日本古典文学全集』の頭注、なお玉上琢彌氏も『源氏物語評釈』で朧月夜が源氏にとって非常な困難危険を伴う相手だと論じる。

- (21) 前掲注(12)の著書で高木和子氏は、源氏の正妻の兄弟という頭中将の立場から「あまり深刻な話がバレたのでは具合が悪い」ことを指摘している。

- (22) 吉海直人氏は「末摘花巻の乳母達」『平安朝の乳母達―源

- 氏物語』への階梯―』世界思想社一九九五年九月
(23) 玉上琢彌『源氏物語評釈第二巻』角川書店一九六六年一月
77～78頁

- (24) 西耕生「花のかげ」覚書―夕顔若紫両巻の連続性と躬恒の引歌―』『愛知大学法文学部論集人文学編』二〇〇七年三月

- (25) 引用は『新編国歌大観』からだだが、読みやすさを図って漢字に変換した。

- (26) 異説に関しては、竹岡正夫『古今和歌集評釈古注七種集成』(右文書院一九八六年十一月)を参照した。

- (27) 原岡文子「源氏物語」の「桜」考』『源氏物語両義の糸―人物・表現をめぐって―』有精堂出版株式会社一九九一年一月